

produced by まほよば

双

剣

／

君



著 / 懺悔
イラスト / 河川敷

本作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体とは一切関係ありません。

また本作品を無断で複製、配布、転載、配信することを禁止します。

※本作品は見開き表示がデフォルトで設定されていますが、左右のページが逆で表示される場合は、左記の設定変更をお試しく下さい。

「編集」↓「環境設定」↓「言語（もしくは言語環境）」↓「デフォルトの読み上げ方向」↓「右から左へ」を選択

目次

・ 第一話	3 P	〈
・ 第二話	9 P	〉
・ 第三話	17 P	〉
・ 第四話	23 P	〉
・ 第五話	28 P	〉
おまけ		
・ 壱 (舞)	35 P	〉
・ 弍 (奏)	37 P	〉
・ 参 (珠緒)	40 P	〉

第一話 コンビニとサイドテールとツンデレと

「牛乳と味噌。牛乳と味噌」

二つの単語を呪文のように繰り返しながら、同時に左右の足を交互に前後させる。

やがて脳内に浮かぶその二つ物体はゲシュタルト崩壊を経てアイデンティティを消失させた。

それでも俺は唱え続ける。

「牛乳と味噌。牛乳と味噌」

意味など考えずに繰り返すことで、舌と喉にその響きを記憶させる。そうすればいざ目的の場所に着いたとき、俺の意識が途絶えようとも、自動的にその注文を伝えることが出来るに違いないとの目論見だ。

夏真っ盛りの晴天。脳天に降り注ぐ殺人的の太陽光は容赦無く俺の頭頂部を焼き、思考回路を熱暴走させる。五分前に憶えた英単語が少なく見積

もつても三つほどは蒸発してしまっている。浪人生にとつては致命的な損害だ。たかが単語三つと侮るなかれ。世界は言葉で構築されている。しかし漏出をくい止める手立ては無く、ただ滝のように流れる汗と共に、努力の結晶が夏の高い空に吸い込まれていくのをただ見届けるしかなかった。

とはいえ浪人中という肩身の狭い身分では、母親からのお使いを断る術などあるはずもない。どちらにせよたまには運動もしなければならぬのだ。体調管理も受験に打ち勝つ重要な要素に変わりない。何より『彼女』に会える口実となる。そう自分に言い聞かせながらも、牛乳と味噌という言葉がすっかり輪郭を失った頃、目当てのコンビニへと到着した。

店内に入ると心地好い冷房の風が肌を包んだ。猛暑の道中で火照りきつた身体が冷えて、途端に汗が引いていく。

「牛乳と、味噌だな。よし」

いくつかの英単語を犠牲にしてまで守り切った指令内容を口に出すと、密かな達成感が胸に沸いた。

しかしわざわざそんな苦行を課さなくとも、家から数分の場所に他のコンビニが在るには在る。なのに俺がわざわざこの炎天下の中、遠出してま

でこの店を選んだ理由は明白だ。

値段？

そんなものは気にしない。子供ではないのだ。駄賃が十円や二十円増えたところで喜びはしない。

「らっしやーせー」

そう。

このやる気の無い挨拶の主こそが、俺の足をここまで運ばせる元凶、もといご褒美なのだ。

俺はいつも通り何食わぬ顔でまずは雑誌コーナーへと向かう。その際にレジへ顔は向けない。性急な男はみつともない。まずは一息ついて、あくまで小市民の客を装う。そして週刊誌を手に取り、立ち読みをする振りをして、ガラスに映った斜め後ろのレジの様子を伺うのだ。

欠伸をしている少女の姿が目についた。

幸運の女神の欠伸。

時間からして彼女が勤務していることは間違いないと踏んでいたが、こんなレアな表情まで抑えることが出来るとは、英単語を犠牲にしてまで遠

征した価値があったというものだ。来年の受験は上手くいくに違いない。

そのまま汗が完全に引くまでべらべらと週刊誌を何とはなしに捲っている。内容なんて頭には入るはずもない。うつすらとガラスに反射しているサイドテールの女の子の姿だけに意識が向く。

俺が彼女と出会ったのは半年程前。受験に失敗して意気消沈していた俺がたまたま入ったこの店でレジをしていた彼女を見て、俺は申し分の無い一目惚れをした。絶望に打ちひしがれていた俺に、再戦の勇気を与えてくれた女神。何か言葉を交わしたわけじゃない。それでも彼女の力強い瞳は、「なにクヨクヨしてんのよ」と励ましてくれたような気がした。勿論ただの妄想だとは自覚している。

それ以来勉強の合間にこの店を訪れては、彼女のご尊顔を拝観しに訪れている。半ばゲン担ぎ、半ば息抜きだ。

接客態度はどちらかといえば無愛想。営業スマイルなど目にした事は無い。会計を済ませば言外に「さっさと帰れ」と言わんばかりの空気を醸し出す。当然言葉を交わした事すらない。それでも俺は彼女が気になって、こうして客として通い続けている。

ガラスの中で彼女と目が合いそうになったので、慌てて週刊誌に視線を落とした。大人気グラビアアイドル第二子出産という記事だけが俺の目を引いた。昔は俺も好きでDVDが出る度に購入してはオカズにしていた。さばさばした言動で中性的な顔つきなのに、体つきだけが妙にエロくて、そのギャップに興奮してくださいと言わんばかりのスタイルだった。数年前に突然妊娠からの引退が発覚して、俺もショックを受けたものだった。

もう一度ガラスに映ったレジに立つ少女を眺める。彼女も恋人など居るのだろうか。あまり男つ気は感じない。いや、男どころ他人を寄せ付けなさそうな雰囲気すら感じる。

週刊誌をばらばらと最後のページまで捲り終えると、とりあえず牛乳と味噌を籠に入れてからも、用も無いのにお菓子や惣菜パンを手取る振りをしては、彼女をちらちらと盗み見する。

彼女は気だるそうではあるが、立ち姿は見事に背筋が一本通っていた。
やさぐれた仔猫。

それが彼女の第一印象だった。

誰にも媚びず、省みず、自らの力で生き抜いていくことになんら疑問を

抱いていないかのような尖った氣勢が、落胆していた俺の心を撃ち抜いてくれたのだ。

顔つきそのものは俺と同年代程度の少女然とした目鼻立ちをしているものの、いかにも跳ねっ返りといったきつい目つきをしている。高い位置で束ねられたサイドテールは本体である姫を守護する剣士の刀身のように鋭い印象を受ける。しかし数ヶ月前までその刀身は二つだったのだ。ある日突然片方が解雇された。つまり彼女は元々ツインテールだったのだ。

刺々しくも可憐な二本の刀。
双剣の君。

密かに俺がつけた彼女の渾名だ。今ではその髪型も片刃となってしまう、それはそれでとても似合っているのだが、やはり俺としてはツインテール姿の印象が強く、今でも胸の内を彼女をそう呼んでいる。

なるべく彼女の顔を見ないように視線を伏せながら牛乳と味噌をレジに置く。下心なんて一切無いただの無害な客を装う。電話番号を聞いたりなんて軟派は真似はしない。いや、本当はしたい。したいに決まっている。しかし今は浪人中の身。戦国時代ならばまだ格好もつくが、現代社会にお

いては色恋に興じていられる身ではない。

彼女は手慣れた様子で牛乳と味噌のバーコードを読み取っていった。一切の淀み無い手つきに感服する。何気無い仕草や表情についつい見とれてしまう。これではいかんと視線を落とすとそこにも落とし穴が存在していた。うお、と思わず声が漏れそうになった。

彼女の魅力はその顔つきだけではない。一見中肉中背に見えるその体軀。しかしエプロンの上からでもはっきりと胸部の隆起が見て取れる。結構なものをお持ちであることは疑いようもない。年は俺とさほど変わらないはずだから、高校を出たてかそれくらいのはずなのに、その盛り上がりは圧倒的な存在感を放っている。異性に対して媚びへつらう様な想像だに出来ない雰囲気を纏っている彼女だが、その膨らみだけは彼女の意図とは無関係に男を誘惑している。

「お客さん？」

まづい。

不機嫌を隠そうともしない訝しい目つきでこちらを露骨に非難している。おっぱいという名の満月による万有引力で、俺の視線が伴う欲念は善良な

る一市民の範疇を超えてしまっていたようだ。一時撤退を余儀なくされる。お金を払い、そそくさとレジの前から去る。

「ありがとうございます」

やや突き放すような事務的な挨拶が背中で聞こえた。

嫌われてしまっただろうか。いや。無用の心配だ。別にあの子とどうこうなれると思っていたわけではない。ただ名前くらいは知りたいとは常々思うのだが、名札に視線を向けるとどうしても胸元に気を取られてしまう。思春期の辛いところだ。天然の視線誘導技術に完敗。どちらにせよ見ているだけで幸せになれる。そんな恋とも言えない仄かな人生の楽しみ。

自分が何者なのか、何者かになれるのか、そんな不安など感じたこともないかのような、大樹のごとく力強く立つ彼女に俺は惹かれていた。この気持ちは恋愛というよりは、信仰に近いのかもしれない。彼女の中心には何かとてつもなく強い信念が通っているように思えて仕方が無いのだ。

しかしサイドテールになった双剣の君は、どことなくバランスを欠いてしまっているようにも思えた。

片方の刃を失った彼女は、どうにも収まりの悪さを感じる事が有る。勿

論今でも充分魅力的なのだ。

「おいおい姉ちゃん。可愛いからってお高くとまってんじゃねえぞ」

自動ドアを目前にした俺の背後で、なんとも柄の悪い声が聞こえてきた。今時任侠映画でも中々聞けない台詞だ。

振り返ると、如何にもチンピラといった風情の男が三人連なり、レジを挟んで彼女に詰め寄っていた。

「うちはそういうお店じゃありませんので」

「電話番号くらい良いじゃんか」

男達は一見笑みを浮かべているが、その口調は圧迫感を強調していた。

あからさまな暴力などが振るわれたわけでもないのに、店内の人間達はどうしたら良いのか手をこまねいているようだ。

「あたし電話持ってないから。電波恐怖症だから」

しかし当の彼女本人は微塵も臆する様子が無く、むしろ男達を露骨に小馬鹿にしてあしらっていた。

「さ。用がすんだらさっさとお帰りになってくださいね。またのご利用お待ちしております」

三人組のうち二人は本気で彼女を誘おうとしていたようでまだへらへらと笑っていたが、残りの一人は彼女の態度に腹を据えかねているようだった。坊主頭の、鼻にピアスをした大柄な男。黒いタンクトップの下には、これ見よがしと威圧的な筋肉が盛り上がっていた。

その坊主頭がこめかみに青筋を立てて一歩前に出た。

レジ台を挟んで手を伸ばせば互いに手が届く距離。

一瞬で店内の空気が緊迫する。

それでも彼女は怖じ気つくどころか、むしろ不機嫌そうに腕を組んで男を見据えていた。並の男でも腰が引けてしまいかねない威圧感の中、彼女は毅然とその場に根を張ったように直立していた。

美しい。可愛い。格好良い。そのどれもが当てはまるし、どれもが彼女を表現し尽くせていない。

いつの間にか俺の足はレジに向かっていた。

男の右腕がゆっくりと振り上げられる。

俺は無我夢中で駆け寄った。

景色が流線形に歪む全力疾走の中、彼女と目が合った。

やはりというべきか、彼女は何も恐れてはいなかった。誰の助けも必要としていない、ふてぶてしい無頼漢の猫のような目。目前に迫るチンピラの拳よりも、俺に呆れるような視線を送っていた。そんな可愛げのない顔もまた胸を打つ。是非ともこれを機にお近づきになりたい。そんな打算と確信が瞬き一回分に満たない時間の中交差する。

その直後、丁寧にワックスで磨き上げられた床で足を滑らせた俺は、顔面から床に激突すると同時に世界が暗転した。

目が覚めるとまず頬の痛みに気付く。

顔の半分が妙に熱い。

鈍い痛覚が頭にガンガンと響く。

ああそうだ。愛しのレジ嬢である双剣の君を庇おうとして、足を滑らせて顔の側面をレジに打ち付けた瞬間で記憶は途絶えていた。

俺は事務室と思われる狭い室内で、並べたパイプ椅子の上に寝かされていたようだ。

現状を認識すると頬を抑えながら上半身を起こす。頬にはガーゼが貼っ

てあった。

目の前には例の彼女が俺を見つめていた。正確には見下ろしていた。さらに正確に言えば視線は同じ高さだったのだが、見下ろされているような風格を感じた。

彼女は俺と同じパイプ椅子に足を組んで腰を下ろし、膝の上に肘を立ててやや猫背で頬杖をついていた。まるで俺を値踏みするようなジト目で真っ直ぐと直視している。俺は引き込まれるようにその視線を受け止めた。いや、目が離せないでいた。

「誰が助けてって言ったの？」

「え？」

俺が期待していた「素敵、抱いて」といった言葉とは似ても似つかない冷たい一言だった。彼女の口調は苛立ちすら含んでいた。

「余計な真似しないでよ」

「……そういうわけにもいかないだろ」

流石に俺もむっとくる。たとえ心のアイドルが相手だろうが言うことは言う。それが俺という男だ。

彼女は大袈裟に肩を竦めながら溜息をついた。

「あんたさ、いつもあたしの事じろじろと見てたでしょ？」

まさかバレていたとは。しかし俺は狼狽えない。逆境こそ堂々と胸を張る。

「ああ。見てたけどそれが何か？」

まさかの開き直りに彼女も一瞬たじろいだようだが、すぐさま平静を取り戻す。

「さつきは胸まで見てたでしょ？」

「おう。見たぞ」

「やらしい目で」

「そんなでかい乳を目前にして悟った目をしてられるかってんだ」

ずっと憧れていた女の子と、客と店員としてじゃない初めての会話。女の子に元々不慣れな事に加え、照れ臭さも手伝ってか粗暴な口答えしか出来ない。まさか自分がツンデレキャラだったとは思ひもしなかった。

「キモいんだけど」

「それが男ってもんだ」

「どうせ良いところ見せてお近づきになりたいなんて思ったんでしょ？」

凶星で息が詰まる。それでもここは一步も引いちゃいけない気がした。

「そうだよ。悪いかよ」

「あたしがタイプだから助けただけなんでしょ？ そうじゃなかったら素通りだったんでしょ？」

段々とお互いに声を荒げていく。いつの間にか俺達は立ち上がり、鼻先を近づけあうほど前のめりになっていた。

「タイプじゃなくても警察くらいは呼ぶわボケ！」

「ボケとは何よボケとは！ 冴えない面構えして！」

もはやただの売り言葉に買い言葉。完全に喧嘩腰である。

「じゃあなんだ！？ お気に入りの女の子が絡まれてても助けるなってか？」

「うっさい！ 下心で人助けなんてしてんじゃないわよ！」

彼女の右手が平手打ちとなって俺の左頬を襲う。ガーゼが貼られた左頬。彼女を守るうとして傷ついた左頬。これを更にぶたれたら、さぞかし悶絶する痛みなのは想像に難くない。普段の俺ならば避けようとしてみつも

なくひっくり返っていた事だろう。

しかし俺は動こうとしなかった。

どういいうわけか俺は、彼女のその怒りを受け止めなければならぬ気がしてならなかった。

彼女が何に対して怒っているのかすらわからなかった。

それでもそれがただのヒステリーや八つ当たりなどではなく、もっと深く重い何か彼女の瞳に宿っていたような気がしてならなかった。ずっと彼女を隠れて視姦していた俺だからこそわかる。

目を瞑り歯を食いしばる。

しかし待てども待てども衝撃は訪れない。

やがて緩やかな風圧だけが頬を撫でた。

彼女の右手は、俺の左頬寸前で止まっていた。

それでも彼女は俺を睨み続けていた。その目にはうつすら涙が浮かんでいた。

「……なに泣いてんだよドブス」

「誰がドブスよ！」

今度は躊躇無くビンタされた。

バチコオンツ！ と景気の良い音が炸裂すると俺は床にはっ倒されてしまった。無傷の方である右頬を狙われたのはせめてもの武士の情けだったのだろうか。

「この変態！」

そんな妙にリアルな悪態と同時に勢い良くドアが閉められた。

いかにも一筋縄ではいかなそうな女だとは思っていたが、まさかこうまでじゃじゃ馬だとは思ってもいなかった。

しかし不思議なことに俺は心のどこかで安堵していた。チンピラから身を呈して守ったくらいで、ほろりとくる安っぽい女でなくて良かった、と。双剣の君はこうでなくてはならない。たとえ命の恩人が相手でも媚びへつらったりなどはしない。罵倒するくらいで丁度良い。何人たりとも拒絶する断崖絶壁に咲く一輪の花。彼女にはそうであってほしい。

その後、彼女と入れ替わりで事務室に顔を出したコンビニの店長から色々と教えられた。

俺が一人勝手に気絶してから、あの子が見事にチンピラ三人をのして警

察に突き出したこと。（どうも彼女には護身術の心得があるようで、俺のしたことは全くのお節介で骨折り損だったわけだ）

このガーゼは彼女が処置してくれたこと。そして気を失ったままの俺を、勤務時間が終わっても看病し続けてくれたこと。

俺は店長に繰り返し謝罪をされたが、大事にはしたくなかったのでさっさと退散した。

外はいつの間にか雨が降っていた。傘も無いまま帰途につく。夏風邪は困るが家まではそう遠くはない。それになにより、雨に打たれたい気分だった。

滴る雨粒が頬を濡らして傷を疼かせたが、わりと痛快な気分です。雨の街を闊歩した。色々と散々な目にあつてしまつたがけして悪い気分ではなかつた。むしろ足取りは軽くなる。俺はちよつと嬉しかったのだ。可愛いなと思つていた女の子の為に身体を張れたこと。そしてその女の子が思つていた通りのとんだお転婆姫だったこと。

左頬のガーゼをそつと撫でるとほんのりとした温もりを感じた気がした。思わず頬がにやける。

同時に右頬もひりひりと熱を帯びた。

「遠慮の無い思い切りの良いビンタだったな」

俺は決してマゾヒストなどではないが、初めて女性に打たれた頬は、不思議と心地好い感触が残響していた。

それにしても彼女のあの怒りはなんだったのだろうか。それだけが不可解だった。まるで俺に対してではなく、自分に向けているかのような口振りだった。だからこそ、頬には彼女の何かを受け止められたかのような満足感が痛みに入り交じっていた。

そんな事を考えながらも、折角外出したのだから少し遠回りをして、雨の公園を散歩と洒落こもうなんて思い立つ。

当然だが雨が降る公園に人氣は無い。この公園は城跡に作られたもので、街中に存在するわりには敷地はかなり広く、また背の高い針葉樹が林立しているの、中央部の広場まで足を踏み入れれば、途端に外界から遮断された辺境と化す。普段はそれなりに家族連れの喧噪で賑わっているのだが、流石に今は雨音だけしか聞こえない。やや霧が立ちこめた周囲の風景は、幻想的といえれば聞こえはいいが、どちらかといえれば気味が悪くも感

じる。

浮かれ気分だった俺の背中に一転して悪寒が走る。

さっさとここを抜けよう。

第六感がそう命じてきた刹那だった。

「何をしてたんすかね？」

地面を叩く雨粒の音をすり抜けて、どこからともなく声が聞こえた。

周囲を見渡す。やはり人の姿は無い。

「舞ちゃんと密室で、二人きりで、何をしてやがったんですかね？ と聞いてるっす」

「誰か居るのか？」

その場で一回転するも、目に映ったのは俺を囲うように存在する霧と林だけ。

狐に化かされた気分とはまさにこの事だ。意味のわからない問いを投げかけてくるこの声は、はたしてこの世のものなのだろうか。状況も相まっつてそんな素っ頓狂な考えが頭をよぎる。

「さっさと質問にだけ答えて欲しいんですけど、やれやれ。これだから男っ

てやつは」

「露骨に蔑みの感情を込めた言葉の出所がようやくわかった。雨粒と一緒に空からこぼれ落ちていたのだ。」

顔を上げると針葉樹の先端に、人影が立っているのが見えた。

「おい、危ないぞ……っ！」

野生の獣でもあるまいし、人間が自力でそんな場所に立てるわけがない。なんらかの事故性を感じた俺は慌てて声を上げる。

しかし木の上の人影は俺の心配を一笑に伏した。

「あはは。それはお気遣いどうも」

俺は絶句した。その声色は女にしか聞こえなかったがそれは一先ずどうでも良い。落ちれば間違はなく即死であろう、それも足場とも言えないような場所に立っているその女は、己に危機など何も迫っていないかのよう
に笑った。

「いったい何の冗談だ。」

「気が触れているのか？」

「いや、やはりそもそもどうやって登った？」

突如として突きつけられた非現実的な光景に、上手く思考が纏まらない。ようやく通報という対処を思いついた矢先の事だった。

女はとん、と木の頂上から気軽に飛び降りた。

「おいおい冗談だろ」

思わず目を背ける。

一瞬で最悪の事態を想定する。水溜まりを赤く染める全身の骨が折れた遺体。

全てを諦めたその瞬間、リフレインしたのはあの子の言葉。

『あたしがタイプだから助けただけなんですよ！？ そうじゃなかったら素通りだったんでしょ！？』

両頬が疼く。

俺は思わず咆哮を上げていた。

「俺が助けられるのは目の前の人間だけなんだよ！」。

落下地点を見据えて全力疾走する。今日はよく走る日だ。運動不足の浪人生には辛い。

しかし決死のスプリントは数歩で終わった。

宙に投げられたその身を見上げて俺は思わず立ち止まった。

何の気負いもなく、暴れもせず、人形の如く真っ直ぐ自然落下を果たすその身体に、手を差し伸べる必要は無いと俺の本能が判断した。塀から飛び降りる猫を心配する人間は居ない。

俺の目の前で、彼女は至極当然のように地面に降り立った。雨粒とは違い音も立てず、潰れもせずに。

女は派手な色で英字がびっしりと書き込まれたTシャツを着ていた。髪は金色に染まり、シャギーが目立つボーイッシュな髪型をしていた。何より特徴的だったのは、彼女の耳を覆い被さるヘッドホン。雨足が強くなってきたにも関わらず、重低音が音漏れしていた。

「何アホ面してやがるっすか。ああ元々そういう面なんすかね」

「……お、おい……怪我は無い、のか？」

俺の問い掛けに対して、彼女はお腹を抱えて笑った。雨音では消しきれないほど無邪気に笑い声を上げた。その姿はどこにでも居る少女にしか見えなかった。依然としてヘッドホンからは音楽が漏れ聞こえていて、そんな音量で音楽を聴きながら、会話なんてし辛いのか、などと俺は悠

長に考えていた。あまりの困惑に一種の思考停止状態に陥っているのだと自覚する。

彼女はひとしきり笑うと、俺に向けて顔を上げた。

尖った装いとは対照的に童顔ともいえる、丸味を帯び輪郭と目鼻立ち。その顔が不機嫌そうに歪む。

「ボクの心配してる暇なんか無いっすよ。なあに。心配ご無用っす。ちよつと痛い目見てもらうだけですから」

不意に女は俺の胸ぐらを掴むと、そのまま俺の身体をいとも簡単に持ち上げた。小柄な少女が、大の男を、片腕一本で。

直後、俺は暗闇に包まれた。なんの前触れも脈絡も無く、唐突に一切の光が失われた。瞬きする間もなく夜になったのだとしか思えなかった。いや違う。雨音すら届かない。宇宙空間に放り出されたのかと錯覚するほど、その空間は光と音が欠落していた。しかし空気はあるようで呼吸は出来る。その場でぐるりと一回転するが三百六十度完全なる漆黒に乱れはなかった。手を伸ばすと何かに触れた。壁だ。ざらざらしている。その場に立ったまま手を這わせるとどこまでも続いているようにも思えた。不安は上限な

く広がり続ける。

「おい！ おおい！」

壁を叩きながら大声を出してみるが、空間の中で音と声が反響するだけ。外からの反応も無し。

怪我や身体の不調は感じられないものの、突然こんなところに閉じ込められては焦りも出る。なるべく平静を保とうとはするが、微塵も困惑するなという方が無理がある。

「……ぶちかますしかないか」

助走の距離を取ろうと一歩後ろに引くと、それだけでもう背後の壁に背中を打った。どうやら思った以上に狭い空間に閉じ込められているらしい。それでも俺は出来る限りの膂力を振り絞って、前方の壁に肩から突進してみた。俺の体格は成人男性としては平均の範疇に収まるものだが、それなりの衝撃を与えることが出来るはずだった。

しかし壁はびくともせず、やはり外からの反応も無い。

「どうなってんだよ……なんだよこれ」

思わずその場にへたりこむ。

その瞬間だった。

空間が揺れた。壁が、ではない。俺の周囲を纏っている空気そのものが、俺をシャッフルするように激しく震動したのだ。

警戒体勢を取ろうとして立ち上がった俺はすぐさま転倒してしまった。

誰かに押されたわけでもなんでもない。ただその空気の震動が俺の平衡感覚を奪うほどに強烈だったのだ。

一寸先もわからぬ暗闇の中で這いつくばった俺の耳には、ギターが歪む音や、スネアがリズムを刻む音がうっすらと認識できた。

この空間を揺るがすその正体が、大音量の音楽である事によく気が付く。

咄嗟に耳を塞ぐが何の意味も為さない。その音と表現するにも憚れる空気の振動は、鼓膜など介さずとも直接骨を軋ませ、臓腑を打ち砕かんばかりに鳴り響いていた。

このままでは死んでしまう。

そんな恐怖が頭をよぎった瞬間だった。

ギャキンっ！

俺を押し潰そうとするパンクミュージックとは明らかに別種の甲高い金属音が轟音の狭間で聞こえた。

すると暗闇の中に稲光状のヒビが入り、そこから光が漏れると同時に音も止んだ。

自分が卵から孵化した雛のような感覚に陥る。暗闇の壁が崩落していきやがて見知った景色が広がった。雨が降りしきる公園。そして目の前には例のパンク少女。しかしその少女は俺を見ておらず、顔を明後日の方向に向けていた。その表情は先程までの暴虐的な振る舞いが嘘のようにしおらしい。

俺も釣られて少女の視線を追った。

そこには双剣の君が、眉間に皺を寄せて仁王立ちしていた。憤怒の視線を向けられたパンクな少女は明らかに萎縮している。

「奏（かなで）……あんた何してんの？」

「いやあ、あの、その……えへへ」

双剣の君が奏と呼んだパンク少女はしどろもどろになりながら一歩引いた。

俺は事態が飲み込めずただ成り行きを見守る事しか出来ない。というよりは、先程までの拷問じみた爆音のせいで、未だに手足が痺れ、三半規管もおぼつかない状態が続いている。

張り詰めた緊張感の中、雨粒だけがしとしとと音を立てる。

淀んだ空気を破ったのは、更に聞き慣れない声。

「舞。そう責めてやるな。奏のそういった行動に他意が含まれないことはお前もよく知っているだろう」

霧が掛かった遠方から、やけに整然とした物言いが聞こえてくる。

声の主はカツカツカツ、と規則正しい歩調でパンク少女の背後から姿を表した。

「そして私が再びお前の前に姿を表した理由も、また明々白白といえる。説明の必要は無いな？」

長身の女だった。黒いスーツは軍服のように厳めしく、短めのスカートから伸びた足は扇情的というよりは凛々しく目に映った。

ばさばさと所々が跳ねるように伸びた黒髪。確固たる意志が前面に押し出された顔つき。歯切れの良い口調。その全てが彼女の内面を一言で表し

ていた。

威風堂々。

その一言が彼女の印象全てを物語っていた。

ただし、耳の辺りで結われてそのまま真下に垂れるツインテールだけが、せいぜい俺と同世代の少女であることを推測させた。

彼女は俺に向けて会釈をすると、パンク少女に向き直り、そしてその脳天に拳骨を落とした。

「痛いっす！」

頭を抑え蹲るパンク少女の前で、表情一つ変えず口を開いた。

「失点その一。善良なる一般市民に魔法を行使した。失点その二。事前に隠蔽工作を怠り魔法を行使した。失点その三。やるからには完遂させろ。たとえ『双剣の舞』の妨害があるうと、拘束した状態で易々と逃げられるな」

「淡々とそう言い切ると、再び俺に向かって頭を下げた。

「すまなかった。同胞の無礼をどうか許してくれ」

やけに清涼感溢れる口振りと所作に思わず感心する。

「え？ あ、ああ」

まだ耳鳴りが五月蠅かったが、それでも彼女の声はすんなりと心地よく鼓膜を揺らした。現状は全く飲み込めていないものの、つい謝罪を受け入れてしまった。というよりは有無を言わさぬマイペース振りにそうせざるをえなかった。

軍服の女は双剣の君に向き直ると、やはり泰然とした様子で口を開いた。その身を濡らす雨粒など有って無きが如き振る舞い。雫が長い睫毛を伝って滴り落ちていく。

「そして改めて舞。久しぶりだな」

「そうね。欧州出張は終わったの？」

双剣の君も堂々とした態度を崩さない。

「ああ。任務は滞り無く完了した。他の二人もやがて帰国する。勿論皆元気だ」

「そう。良かった」

双剣の君はサイドテールをかき上げると、安心したように微笑みを浮かべた。しかしその笑顔にはどこか寂莫とした雰囲気がついてくるようにも

感じた。

「やっぱりあたしが居なくても大丈夫みたいじゃない」

「馬鹿を言ってもらっては困る。私達は四人で『八尾隊』だ。舞が欠けることは、虎が爪を失うに等しい」

「奏も充分成長したんでしょ？ あたしの穴なんて埋まってるんじゃないの？」

「確かに奏の成長も著しいが、彼女はあくまで補佐役に過ぎない」

先程まで膝を折っていたパンク少女が、ここぞとばかりに身を乗り出す。

「そうっすよ。ボクなんてただの小間使いっす。やっぱり舞ちゃんが居ないと」

熱く説き伏せるパンク少女とは対照的に、軍服の女はあくまで落ち着いた物腰で、そっと腕を彼女の前に水平に差しだして黙止を要求した。パンク少女もまだ何か言いたげだったが大人しく口を噤む。

「舞。四の五のは言わん。再び手を取り合い戦おう」

「嫌よ」

流石は双剣の君。未だもって話の内容はちつとも飲み込めないが、とに

かく馴染みの深い知人からのお願いを即答で断ったという事だけは理解出来た。そのツンツンっぷりは、見ていて爽快極まりない。

しかし独断即決っぷりは、軍服の女も負けてはいなかった。微塵の動揺も躊躇も見せず、返す刀で口を開いた。

「せめて話を聞いてくれ」

「嫌だってば」

「少しだけだ」

「絶対嫌」

軍服の女はやれやれとかぶりを振ると、あくまで肅々とした口調で言った。

「そうか。ならば実力行使と行こう。奏。舞を拘束しろ」

「ラジャっす！」

言うが早いか、目にも止まらぬ速さで、双剣の君が黒く丸い何かに包まれて、その姿は完全に飲み込まれてしまった。

俺はようやく、先程の自分が何に閉じ込められていたのかを知る。

それは巨大なヘッドホンだった。

よくよく見れば、パンク少女が頭部に掛けていたヘッドホンが無くなっている。あれが巨大化して、左右のイヤードが左右からお腕で挟むように俺を拘束して、その上で爆音を響かせていたのだ。

しかしヘッドホンには一筋の亀裂が走っていた。おそらくは先程、双剣の君が俺を助けてくれた際に出来た傷に違いない。そしてその推測は当たっていた。

「珠緒（たまお）さん。長くは持ちませんよ！」

「一秒で構わん。そのまま耐えろ」

俺は相変わらず置いてけぼり。しかしどちらにせよ、まだ三半規管は正常に作用していないので静観を決め込むしかない。

巨大なヘッドホンが聞き覚えのある金属音と共に内部から揺れた。

しかしその漆黒の外殻は、内部から切り刻まれた卵の殻のようにバラバラと四散した。

中から姿を表した双剣の君の片手には、まさしく剣が握られていた。それは刀身が太い日本刀というよりは、いわゆる青竜刀に近い代物に思えた。何より俺の目を引いたのは彼女の髪型だ。

サイドテールが無くなっている。

そして俺の驚愕はまだまだ加速する。

「時間稼ぎとしては充分だ。奏。及第点をくれてやろう」

腕を組んで仁王立ちしていた軍服の女のツインテールが、一人でに前方水平方向に伸びていたのだ。それだけではない。ツインテールそのものが膨張すると、鋼鉄の質感を帯びて、砲塔の形状に変化していた。

「相変わらず目的の為に手段を選ばないのね」

双剣の君は己に向けられた筒先に対して、むしろ嬉しそうにそう言った。

「お褒めに与り光荣だ。それでは耐えろよ。発射」

あまりに淡々とした号令とは裏腹に、ツインテールの先端が目も眩む爆炎を上げた。照準は言うまでもなく双剣の君。

彼女を爆心地として発生した爆発による衝撃で尻をつく。

「一体何だっつてんだ！」

思わず叫んだ。

彼女の身を心配する暇も無く、煙が雨で消え去っていく。

双剣の君は手に持つ長刀の幅広い刀身で身を隠しており、その背後には

軌道を逸らしたと推測される砲弾で発生した地面の亀裂が広がり、その中心は炎が燃え盛っていた。

いまだ燃え上がる炎柱の熱風が身体をじりじりと焦がした。ただでさえ痺れている身体が恐怖で硬直する。なのにいつの間にか俺の身体は宙を飛んでいた。尻餅をついていたはずの地面は遙か下。雨空の中を疾走している。文字通り火急の危機に俺の潜在能力が覚醒？ そんなわけがない。俺は双剣の君に抱きかかえられ、針葉樹林の上を滑空していたのだった。

「……逃がしたか」

弾正正宗珠緒は宙を舞うかつての戦友の背後を見上げながら呟いた。

「追いますか？」

「いや。一旦間合いから離れられると私達のスピードでは舞を捕らえることは不可能だ。直線的な機動力で彼女に敵う魔法少女は早々居ない」

無表情で肩を竦めるが、その口調にはどこか誇らしさが入り混じっている

た。

「さっすが舞ちんっすね」

自己修復したヘッドホンを元の大きさに戻し、それを頭に掛け直した立日奏も同様に逃走した相手を称讃する。

「でもさっきのは危なかったんじゃないっすか？ あんな至近距離でぶちかますなんて」

「勿論手加減はしたさ。あの彼にも被害が及ばないようにな。しかし思った以上に刀身は鈍ってはいなかったようだ。舞の奴め……一線から退くとは言ったものの、その切れ味に陰りは無いと見える。ふふ」

「でも流石に魔力消費は著しいみたいっすね」

「そうだな。継戦能力にはブランクの影響が大きく伺える」

「とりあえずどうしましょ？」

「とりあえず？ そうだな。とりえあずは、こうだ」

「弾正正宗珠緒は再び立日奏の脳天に拳骨を落とすとした。」

「ぎゃっ！ またっすか！」

「貴様の舞へ抱く特殊な感情は知っている。それについては非生産的だの

なんだのと口を挟むつもりはない。しかし私情に駆られて一般市民に能力を使うとは何事だ」

「ちよ、ちよっと懲らしめるつもりだけだったんですってば……二度と舞ちに近付かないように……だって久しぶりに日本に戻ってきて、舞ちに会いに行こうとしたら、密室でずっと二人きりとかうらやま……けしからんじゃないっすか……」

「どのような理由があるうと言語道断だ。係長の耳に入れば面倒臭いことになるぞ」

「ぞぞ。あのオヤジにはどうかご内密にお願いします」

「まあいい。やってしまったものは仕方が無い。二度目は無いぞ」

「すいません……」

「やれやれ。それにしても面倒な事になったものだ。ありふれた旧友の再会のはずだったのだが……お土産も渡しそびれてしまったではないか。ほら、ローマの空港で買ったキーホルダー。可愛いだろう」

「なんですそれ？ 壁に衝突した巨大ミミズっすか？」

「なにを異な事を。どう見ても愛らしい兎さんだろう」

「……まあ珠緒さんがそう言うなら……しかし大人しく話を聞いてもらうために拘束からの砲撃コンボを決める旧友なんて中々無いっすけどね」

「舞は頑固だからな。通常の手立てでは門前払いは見えている。何より戦友の握手とは荒々しくも雄々しいものだ」

「そういう意味ではボクの行動が役に立ったって事っすね」

「結果論だ馬鹿者。私が貴様の行動にすぐさま気付いてこの公園に人払いの结界を張ったから良かったもの………ん？ あれは何だ……」

俺が突然襲われた場所からどれだけ離れただろうか。双剣の君は城壁脇に設置されていたプレハブ小屋近くにいと容易く着地した。それも俺を抱きかかえたまま。

「はい」

そう言ってまるで猫を放り投げるように俺を地面に下ろした。

「わ、わっ」

「ほら、しゃんと立ちなさいよね。怪我は無い？ 見せなさい」

そして俺の顔をまじまじと見つめる。目の前には刺々しくも麗しき少女のご尊顔。それが悲痛に歪む。

「……え、あんた……どうしたのこの顔……ひどい……まさかさっきの
で？」

俺の右頬を撫でながらそう言った。

「いやお前がビンタかましたんだろが」

「あ……」

彼女は気まずそうに目を逸らすと、「……まあ良いじゃない。左右対称
になって」と言った。

「てめえこら」

「はいはい文句は後で。とりあえず身を隠しましょう」

彼女が俺に背を向けてプレハブ小屋の扉に両手を掛けると、ゴギヤつ、
と不快な音を立てて扉が開いた。その際取っ手の部分が不自然に歪み、南
京錠が無造作に地面へと転がり落ちたのを見て見ぬ振りをした。

「何してんのよ。さっさと入りなさいよ」

「……うっす」

「取っ組み合いでは勝てる道理が無いことを悟った俺は素直に彼女の言葉に従った。」

「プレハブ小屋の中はただの物置になっており、壁には筒状に丸められたブルーシートが立てかけられていた。彼女は無言のままそれを地面に転がすと、腰を下ろした。」

「なにぼーっとつたってんのよ。あんたも座れば」

「言われたまま肩を並べて座る。」

「どちらも当然ずぶ濡れだ。残念な事に双剣の君は厚手のポロシャツを着ているので下着は透けていない。しかし濡れた衣服がびっちり素肌に張り付き、彼女の着やせする体型の起伏を強調していた。」

「彼女と目が合いそうになり慌てて視線を逸らす。その先はサイドテール。鋭いその先端からは水が滴っていた。俺は思わずそれを引っ張った。」

「痛い！ 何すんのよっ！」

「あ……すまん」

「足を踵で踏まれる。先程まで見せていた超人的な力ならば、俺のつま先

は見るも無惨にコンクリートと一体化してしまったに違いない。しかしただ痛いだけで爪すら割れていないようだった。手加減してくれたのだろうか。

「いきなり何すんのよ」

「いや、さっきみたいに取れるのかなって」

「アホか！ これはウィングでもなんでも無いの！ れっきとした地毛よ地毛。魔法少女状態だと武器になって取り外し可能になるだけで」

「魔法少女？」

彼女は自らの失念を嘲るように首を横に振った。

「……あく。やっぱ現場から遠のいてると駄目ね。機密保護の観念すら薄らいじゃう」

忌々しそうに頬杖をつくど、俺を横目でぎろりと睨む。

「ていうかあんた、なんで奏に絡まれてんの？」

「奏ってあのパンク少女？」

「そう。立日奏。それであのおっかないのが弾正宗珠緒」

「いやなんか、急に舞ちゃんと二人きりでどうとかって……」

「はあ……あの馬鹿……」

「舞ちんってお前の事か？」

「そうよ。剣乃舞。それがあたしの名前」

「『双剣の舞』ってのは？ その、ま、ま、魔法少女としての、ふふ、ふ、二つ名ってやつとか？」

緊迫感溢れる現状を認識しているつもりだが、ついつい笑ってしまう。我ながら幼稚な発想だと思ったが、それが正鵠を射ている確信を同時に抱いているのがなんともシュールだった。

彼女は頬を染めながら、眉間に皺を寄せると、ふいつと顔を逸らしてしまった。

「そうよ。悪い？ 別にあたしがつけたわけじゃないし」

「へえ。まあまあ格好良いじゃん」

「笑ったじゃない」

「正直うける」

「むかつくわねあんた」

「でもよくよく考えたら、俺もお前のこと双剣の君って呼んでたわ」

「は！？　どこで」

「脳内で」

「気持ち悪っ！」

「そっちのがまだ文学的だろうが。大体なんだよ魔法少女って」

「説明すんの面倒臭い。ていうかあんた目の前で色々見たでしょ。勝手に察しなさいよ」

「無茶言うな。それにこっちは命狙われたんだぞ？　知る権利くらいあんだろが」

「あんたが変態面してるからじゃないの」

「生まれたところからこの顔面だつつの」

「じゃあ一般人の命なんて狙うわけないでしょ。そういう風にあたし達は出来ていないんだから」

「なんだよそれ。あいつら悪の魔法少女とかじゃないのかよ？」

「悪？」

彼女は自嘲するように鼻で笑った。

「どっちかっていうと……悪の魔法少女はあたしの方かもね。心配しなく

でも珠緒も奏も混じりつけ無しの正義の魔法少女よ」

「いやだから俺拷問されかけたんだけど」

「だからそんなつもりは無かったって。適当に痛めつけるつもりなだけだったんでしょ」

「なんで？ 俺は悪の怪人でもなんでもないぞ。変態でもねーからな」

双剣の君は気まずそうに視線を逸らした。

「……奏はその……なんていうか……ちよつとあたしに憧れてるかなんかしてるみたいで……」

「……つまりあれか。あのパンク少女はお前に惚れてる百合少女で、俺は嫉妬でとばっちりを受けたってか！？」

思わず立ち上がって声を荒げる。

「まあそういう事。ご愁傷様。悪い子じゃないんだけどね。文字通り正義の味方だし。ただあたしの事を崇拜しちやってるっていうか」

「なんだよそれ……」

俺は肩を落とすと、再び腰を下ろす。

「過ぎちまったもんは仕方無いけどさ、こちとら被害者なんだから説明を

受ける権利くらいあると思うんだけど？」

「……ま、それもそうね。本当は機密情報なんだけど、あたしはもう部外者だし、あんたも納得出来ないだろうし」

彼女はどこか寂しそうに俯くと、訥々とした様子で肩を竦めた。彼女の口から出た部外者という言葉は殊更投げやりな様子に聞こえた。

「まあ笑ってもいいけどさ、魔法少女ってのは実在するんだ。日本全国にね」

「あの二人や……その、舞ちんみたいなの？」

「舞ちん言うな」

「じゃあ何て呼べば良いんだよ」

「普通に名字で良いでしょ！ あと双剣の君だなんて小っ恥ずかしいのも未来永劫禁止！ 脳内でも禁止！ わかった！？」

「はいはいわかったよ。で、剣乃みたいなのが日本中に居ると。どれくらい？」

「正確な数字はわからないけど……あたし達第二世代は一万くらい？」

「一万人！？ っていうか第二世代ってなんだよ？」

「ああもう、そこから説明しなきゃなんないのか……面倒くさいなあ」

俺はわざとらしく耳を擦る。

「ああ、耳が痛いよお……なんでこうなったか知りたいよお……」

「……わかったわよ。ていうかその言葉通りよ。日本には第一世代と第二世代の魔法少女が混在してるの。といっても第一世代は魔女って呼ばれるんだけど……数年前のS市で起こった隕石落下事件憶えてる？」

「当たり前だろ。世界中で大ニュースになったじゃねえか」

まだ俺が中学生の頃だった。隣県のS市に突如として降り注いだ一個の隕石は、その街を地図から消滅させた。文字通り一面焼け野原となる致命的な被害を被ったにも関わらず、迅速な警報からの避難誘導で死傷者はゼロに留まったという、色々な意味で世界の注目を集めた大災害だった。

「あれは第一世代の魔法少女、つまり魔女が引き起こしたの」

「はぁ！？ 街一つ消し飛ばした隕石が？」

「隕石なんて落ちてない。二人の魔女がああ街で戦っただけよ」

「なんだそれ。大体隕石落下時による爆発の映像なんて世界中で公開されてんじゃねーか」

「あれは半分が本物。半分は偽物って話」

「半分？ どういう事だ？」

「その辺はあたしも詳しくは知らない。あたしが魔法少女になる前の話だし。CGとかじゃないの？ 少なくとも大気圏突入時の映像は本物って聞いたけど」

「あれが作り物とか思えないんだが」

「そんな事知らないわよ。最近のハリウッドは凄いでしょ？ 大体さ、おかしいと思わないわけ？」

「なにが？」

「あれだけの大災害で死者が0だなんて」

「そりゃまあ、確かに……」

その言葉には同意せざるを得ない。

そう。あまりにも避難の手際が良すぎた。街が一つ消えた規模の災害で死者が0。更には避難者の大半が避難した記憶すら無いというのだ。深夜だったので寝たまま、もしくは寝起きで無理矢理搬送されたという事実も大きな要因だろうし、緊急時におけるパニックが引き起こした一時的な記

憶障害と集団催眠が複合したとも言われているが、それにしてもそうそう納得が出来る話ではない。

今でも何かしらの陰謀論を唱えるメディアは後を絶たない。S市の地下施設で秘密裏に行われていた核実験の失敗を隠蔽したなどと馬鹿げた話もあるが、やはり決め手となる隕石落下の映像が確かに存在するため、どんな流言飛語も与太話の域を出ることはなかった。現実味があるとすれば、落下したのは自然隕石などではなく人工物だったため、素早く正確に警報が出せたという邪推くらいか。

しかし真実はそれを遙かに上回る奇妙な話らしい。

あの焼け野原がたった二人の魔法少女の戦闘による痕跡？

にわかには信じがたいが、双剣の君である剣乃舞は、そんな素っ頓狂な嘘をつく人間ではないように思える。というよりは、俺が目の当たりにした超常現象からして、何でもありのような気さえした。

「とにかく、魔法少女ってのは昔から居たの。そしてその『S市の大乱』と呼ばれる事件を境に、あたし達第二世代の魔法少女が生まれるようになったってわけ」

「なんでそうなるのかわからんのだが」

「色々システムが変わったのよ」

「なんだよシステムって」

「あたしに言われても知らないわよ。言っちゃえば現場の構成員ってだけなんだし。いや、元構成員か」

理解が及ばないついでに手当たり次第質問を続ける。

「大体何が違うんだよ。その第一世代の魔女とやらと」

「どうなんだろ。あたし魔女と会った事が殆ど無いからなあ。でも全然違うみたいよ。まず魔法少女になる条件や資格、契約方法からして全然違う」

「例えば？」

「第一世代のは言いたくない。とにかくなんていうか……全てが気分悪い」

剣乃の顔が本気の嫌悪で覆われる。これ以上踏み込むと言外に要求する剣呑さが露骨に滲み出ていた。

「……じゃあお前ら第二世代の魔法少女になる資格とか契約って？」

「殆ど無条件に等しいわ。他者を救いたいという純粹な正義感。これだけよ。契約方法も誓約書に拇印押すだけだし」

「ちよつと待てよ。何回も言うけど、俺あのパンク少女に痛めつけられたぞ」

「だからそれは……あたしの事を純粹に想つての行動だったってわけよ。悪い虫がつかないようになって」

「なんだそれ。その程度なら可愛いもんだけど、そんな理屈がまかり通るなら……」

「そうね。正義や救済の定義は人それぞれで違うわ。いつかこの世界を無に帰そうとする、純粹な善意に溢れる偏執的で妄信的な魔法少女が生まれるかもね」

「かもね、って。実際街一つ消すくらいの力があるんだろ？」

「魔法少女や魔女もピンキリよ。個が持つ戦闘能力はいち軍人程度から、大量破壊兵器まで幅広いわ。そうは言ってもあたし達第二世代には街一つ掻き消す程の力は持ち得ないとされてるわ。今のところは、だけど。ま、それでも枷が外れれば危険な存在には変わりないからね。だから『企業』は……あ、『企業』ってのはあたし達魔法少女を管理してる組織なんだけど、魔法少女の存在そのものを縮小したがつてるみたい」

「軍人程度って……世の中の兵隊さんはあんな風に飛んだり跳ねたりしねーよ」

「魔力が切れたらただの人間よ。ちなみに今のあたしはもうすっからかんだだのか弱い少女なんでよろしく。あくあ。やっぱりブランクあるとガス欠早すぎ」

「……じゃあどうすんだよ？」

「別にどうもしないわよ。言ったでしょ。あの子らは正義の魔法少女。そんであたしの旧友。また一緒に戦おうなんて誘われるのが面倒臭いから逃げたけど、別に危険が迫ってるわけでもなんでもない。あんたも動けるようになったんならさっさと帰ったら？」

「俺もう大丈夫なのか？ またあのパンク少女に絡まれたりとか……」

「さっき珠緒が叱ってたからもう大丈夫だと思っよ。直情的だけど素直で良い子だし。しっかし本当災難ねあんた。そのほっぺたといい」

「半分はお前だつっうの。てかさ、自分で聞いといてなんなんだけど、そんなぺらぺら喋って大丈夫だったのか？」

剣ノ舞は小さく溜息を吐くと、数秒押し黙った。俺は彼女が口を開くの

を待つ。彼女は寂しそうに微笑んだ。

「……本当だね。どうしてだろ。自分でもわかんないや。誰かに知っても
らいたかったのかな」

ぼそりとそう呟くと、今度はからかうように口端を吊り上げて言葉を続
けた。

「ふん。でもあんたは記憶消されるかもね。あはは。まあ良いじゃん。今
日一日ろくな記憶無かったでしょ？」

俺は即答する。

「馬鹿野郎。目当てで店通うほどお気に入りの子にビンタされたんだ
ぞ。こんな美味しい思い出消されてたまるかってんだ」

「……馬鹿じゃないの。大体あんたなんてこれっぽっちもタイプじゃない
んだけど」

「な、なんだよ……彼氏とか居るのかよ？」

この際だから玉砕覚悟でアプローチを掛けてみる。命の危険とかは現状
心配無いらしいが、吊り橋効果の末端程度は期待出来るかもしれない。

「そんなの居ない。でも平日の昼間からぶらぶらしてるような男は嫌」

なんともずばりと言ってくれる。

「ろ、浪人してるんだから仕方無いだろ」

「じゃあ尚更じゃない。家で勉強してなよ」

「お、お使い頼まれたんだよ」

「あつそ。それはご苦労様でした」

軽くあしらわれている。元々無謀な試みだとわかっていたものの、こうもけんもほろろに突き放されると流石に心が折れそう。まさかここまで脈無しだったとは。

「ああでも……」

「あ？」

「……今日はありがと。今更だけど。ていうか事務室ではごめん。自分勝手にヒスってた」

「お、おう。まあ、別に良いけど」

突然素直になると対応に困る。

「幻滅したでしょ？ 丁度良かったじゃない。あたしなんか惚れる前で」
「機嫌悪い時くらい誰にでもあるんじゃないの」

既に惚れてるんだよとは言い出せず、一般論でお茶を濁す。

「ほっぺたまだ痛い？」

「べ、別に……もう大丈夫だよ」

「そう」

「うん」

会話が途切れる。雨がプレハブ小屋の天井を途切れる事無く叩き続けた。他に物音は一切しない。あの二人は今頃どうしてるんだろうか。俺はさつさとここから離れるべきなのだろうか。身体はほぼ復調している。走るのは無理でも普通に歩く程度なら問題は無さそうだ。しかし俺はこの場を離れるつもりにはなれなかった。双剣の君と密室で二人きりで嬉しくて下半身がうずうずしちやうなんて下心も無いわけではない。いやそれが大半を占める。濡れたポロシャツが肌に張り付いた彼女の姿は艶やかというよりはもはや年頃の男にとっては刺激が過ぎる。

しかしそれを抜きにしても、どういうわけか彼女をほったらかしには出来なかった。雨の中を流浪する野良猫。人からのお恵みなんて期待してやいないだろう。しかしだからこそ、目が離せない。

黙って思案に耽る俺の隣で、劍乃舞は何かの拍子で思い出したのか、デニムスカートのポケットをごそごそと漁り、手に何かを握ると俺に差ししてきた。

「ん。絆創膏」

デフォルメされた仔猫の絵柄が可愛らしい水色の絆創膏だった。

「なにぼけっとしてんのよ。ほっぺたに貼つときなさいよね」

「別にいいよこれくらい。ちよつと腫れてるだけだし」

「あ、そ」

彼女はやや不満そうに唇を突き出しながらそれをポケットに仕舞った。

勿体無い事をしてしまったかなと内心後悔した。

「しかしあの弾正宗珠緒だっけ？ とんでもねー女だな。いきなり昔の

仲間に砲弾ぶっぱなすだなんて」

劍ノ舞は「はっ」と愉快そうに口元を緩ませた。

「確かにぶっ飛んだ奴よ。たださっきのは目茶苦茶手加減されたけどね」

「そうなのか？」

「当たり前じゃない。あんな至近距離であいつの本気の双砲を受けたら木

つ端微塵よ。あたしの腕が鈍っていないか確かめたんでしょね」

「あれで手加減してたのかよ……」

「あいつが本気出したら凄いんだから。戦車よりも硬くて大きいトロールだつて一撃粉砕よ」

吐き捨てるような口調だが、仲間が誇らしくて堪らない様子が伝わる。

「さっきのでもすごい爆発してたけどあれで人が集まってきたんじゃないか？」

「珠緒はその辺抜け目無いから。きちんと結界張っておいたに決まってるわ」

「そういえばそんな事を言っていたような気がする。

「なんたってあたし達『八尾隊』の指揮官役だからね。ちょっと天然入ってるけど頼りになる奴なんだから」

昔の仲間を評する彼女の口振りはやはりとても得意気だった。ただの信頼感だけでなく、友人として抱いている好感までもが伝わる。

「そんな自慢の戦友なら一目散に逃げなくなたっていいじゃないか」

「あんたが居たらややこしいでしょ。危ないし」

それもそうだと納得していると、彼女は浮かない顔で言葉を続けた。

「……それに」

「それに？」

「……どっちにしろ話なんてないし」

途端に口調が陰る。

「ははーん。何かへまをやらかしてその鼻毛隊だかなんだかをクビになつたとかか？」

「八尾隊だつての馬鹿タレ！ クビだなんて、そんなんじゃないわよ……」
外では雨足が強くなったようで、屋根を叩く音が耳をつんざくようにけ
たたましくなった。

剣ノ舞が怪訝そうに腰を上げた。

「おかしいわね。奏が居るならとつくにこっちの場所を突き止めていそう
なんだけど」

彼女の言葉から推測するに、あのパンク少女はきっと耳でも良いのだろ
う。だから俺と剣乃が事務室で二人つきりだったのも知られていたのかも
しれない。

「帰ったんじゃないか？」

「まさか」

彼女はあの二人と会いたくない、というわけではなさそうだった。とはいっても会いたい、というわけでもなさそうだ。色々と複雑な心境を抱えてそうだ。先程の広場を即離脱したのも、俺の安全性を鑑みてという理由とは別に、あの二人と顔を会わし続けるのに気まずい事情を持ち合わせているのだろうと容易に推測できた。

どちらにせよ俺がこのままこの場に居ても、邪魔になるだけだなと察した俺は腰を上げようとした。相も変わらずわけのわからない状況ではあるが、野暮な長居を決め込むほど鈍感でもない。

「それじゃそろそろお暇するかね。よっこい、ぐえっ！」

突然頭を無理矢理上から抑え付けられた。

「ちよ、なんだよ」

「しっ。黙って」

彼女は俺の頭を驚掴みにしながら、真剣な表情で聞き耳を立てていた。

「……魔力が一つ近付いてる……この気配は、奏？」

俺はリンボーダンスに失敗して転んでしまった人のようなへんてこな体勢で文句を呟く。

「だったら丁度良かったろーが。こっちからご挨拶に伺えよ。先程はどーもどーもって。お久しぶりですねっつって」

「……何か変」

「いやもうさつきから全部変なんだよ」

「ちよっと黙ってて」

彼女は立ち上がると、プレハブ小屋に一つだけ設置されていた嵌め殺しのガラス窓から外の様子を伺った。

「……なんで？」

すると彼女は信じられない何かを目にしたように短く声を上げると、瞬時に身を伏せて苦々しい様子で舌打ちをすると言葉を続けた。

「嘘でしょ……何かに取り憑かれてる。この短時間で？ 珠緒も一緒だったっていうのに？ ありえない」

険しい表情でぶつぶつとそう呟いた。その口調からは、軒並みならぬ緊迫感が嫌が応にも伝わる。

「おい。何が起こってんのかちゃんと説明しろよ」

彼女は一瞬の躊躇を見せたが、どうやら状況は変わり果ててしまったらしい。

「奏が何かに取り憑かれてる。正気を失ってこの周囲を徘徊してるわ」

「何かって何だよ？」

「遠目だけじゃわからない。悪霊とか妖とかその類。とにかく狂化状態に陥ってるのは確か。簡単にいえば理性を失う代わりに身体能力や魔力の出力が上がる状態異常。でもその弊害か彼女本来が持つ感知能力が無効になつてるっぽいのが不幸中の幸いね。そうじゃなかったらあたし達の居場所なんてとつくに突き止められてるだろうし」

「珠緒とかいう女は？」

「少なくともこの辺りには居ない」

俺達がああ二人の前から離脱してからの事を想像する。そのお化けだから幽霊にパンク少女が取り憑かれたと。じゃああの珠緒とかいうツインテールキヤノン女は？ 同様に取り憑かれたか、それとも逃走したか、もしくは……取り憑かれたパンク少女にやられたか、だ。

「どちらにせよ、旧友との感動の再会どころじゃなくなったわけだ」

「そういう事ね」

「剣ノ舞は精神統一を図るように目を閉じて、拳を額に当てながらも俺の問いに答えた。

「俺そろそろお暇しようとしてたんだけど」

「今は出てかない方が良いわ。今度はガチで襲われるかも」

「……マジかよ。あ、そうだ、携帯で助けを呼べば……」

「無駄よ。珠緒の張る結界は電波障害を起こすから」

彼女はそう言いながら目を開けると、手の平を何度かグーパーと開閉して、その小さな掌をじつと見つめた。

「これでやるしかないか」と不満そうにそう呟く。

「やる？」

「あいつを無力化してくる」

「さっき魔力すっからかんって言ってただろうが」

「ちよっとは回復した」

「ちよっとって……」

「奏は元々補助系の魔法少女。拘束や索敵が主な役割。尋常な一対一なら例え狂化で戦闘能力が強化されてようが負けはしないわよ」

「いやいや既に尋常な状況じゃないんだろ？ お前はブランク明けで魔力もすっからかんって言ったじゃないか」

「でもこのまま見過ごすわけにはいかない。今この公園には珠緒が仕掛けた結界で新たな一般人が足を踏み入れる危険は少ない。でもそれも万全ではないし、あいつの方から公園の外に出るかもしれない。それに……」

彼女はそこで言葉を切った。

その先は俺を気遣ってくれたのだろう。

仮に俺達がこのままここで隠れていたとしても、俺が足手まといになる可能性が高い。ならば前述した理由も含め、彼女が単独で打って出ることが唯一にして最善の上策と言えよう。

しかしそれは『彼女以外の一般人を守る』という目的を完遂するならばの話だ。

外にはもしかしたら弾正宗珠緒も同様に狂化とやらの状態に陥っているのかもしれない。もしくはは無事で身を潜めていて共闘してくれる可能性

もあるが、そんな希望的観測を当てには出来ないだろう。

このまま十全ではない状態の彼女が勝負を挑めば、勝算は薄いということとは、彼女の顔色が教えてくれた。

よって導き出される答えは一つ。

一人を犠牲にして、皆を助ける。

その一人とは当然剣ノ舞……では決して無い。

「よしわかった。俺が囮になる」

俺は立ち上がると淡々とそう言った。

「は？」

「俺があいつを引きつけるからその間に仲間を呼んでこい。日本に一人くらい居るんだろ？ あの時緒とかいう女でも良い。そしたら圧倒的多数でボコれ。これぞ勝利の方程式。戦いは数だよ舞ちゃん」

「何言ってるのよ？ 遊びじゃないのよ？ 奏は戦闘系ではないけどそれでも一般人が相手なら素手でも余裕で殺せる身体能力を持つてるわ。なにより今は狂化してるんだってば。下手した肉片よ肉片」

「お前が肉片になるよりかはマシだろ。そうなったら最悪街に被害が出る

んじゃねえのか？」

「あたしは……ならないわよ。腐っても魔法少女なんだし」

「ていうかなんだよ魔法少女って。お前俺と同じ年くらいだろ」

「あんたいくつなのよ」

「十九だよ」

「同じ年じゃない」

「来年で二十歳なのに魔法少女ってなんだよ」

「二十三くらいまでは少女で良いでしょ」

「とにかく俺があいつを引き寄せるからその間に……」

「そんなの駄目って言ってんでしょ！」

剣乃は俺の胸ぐらを掴んで声を荒げた。その怒声は俺に対する苛立ちではなかった。彼女自身の奥底から這い上がる、何かを押し殺そうとする虚勢にも思えた。それは恐怖だろうか。俺を掴む両手は小刻みに揺れていた。

俺は彼女の手を難なく払い除ける。確かにか弱い少女の力だった。魔力なんてちっとも回復していないのだろう。彼女は玉砕しようとしているのだ。しかしそこには他者を救うための自己犠牲という欺瞞すら感じられない

い。自らの勇気を証明する為の、自分勝手な蛮勇に思えて仕方無かった。その蛮勇を以て何かを取り戻そうとしている。

「コンビニで俺に向けた怒りに通じる何かがそこに感じられた。

年端もいかない少女が人知れず化け物と戦っていたのなら、トラウマの一つや二つは抱えているに違いない。それすらも包み込むのが男つてもんだ。

俺は剣ノ舞の細い肩に両手を置いて、これ以上無いほど凜々しく顔を引き締めた。

「舞ちゃんよ。浪人生舐めんなって」

「……意味わかんない上に舞ちゃんって言うな」

「俺のは浪人って言っても狼の方だから。餓狼だから」

「何が餓狼よ。なめろうみたいな顔して」

「何それ。ぐちゃぐちゃな顔って言いたいのか？ おおん？ まあいいわ。お前言ったよな。自分がタイプだから助けたんだって。ああそうだよ。一目見た時から目茶苦茶可愛いって思って、それから用事も無いのにコンビニ通ってお前の顔ちらちら覗いてたよ」

「何よこんな時に……気持ち悪いんですけど。ていうかあんたいつも立ち読みばっかじゃない。せめて何か買っていきなさいよ」

「お金無いし買っても釣り銭手渡してくれねーだろお前」

「だって気持ち悪いんだもん。いつもちらちら見てくるし」

「そんな気持ち悪い連呼すんなや……とにかく、その、なんだ……俺は世界のどこかで餓死する子供の為に泣いたことはないし、紛争で犠牲になる罪無き一般市民を追悼したことねーよ。でも、いや、だからこそ、惚れた女の為にくらい命懸けさせろ」

俺は真っ直ぐ彼女の目を見つめて言い切った。全身全霊を込めて、俺の本音をぶちまけた。

俺は不思議と死をすんなり覚悟していた。彼女のために死ぬるならそれで良いと思った。同時に彼女への想いと比較して、世界がどうあろうが良いという本音をぶちまけた。偽善も立派な善の内だと思っではいるが、こんな状況ならば世界平和など知ったことではない。彼女さえ無事ならそれで良い。本気でそう思ってしまったのだ。少しは装飾すべきかと後悔したが、やはり嘘偽りの交じらない覚悟を届けたかった。

彼女は一瞬呆気に取られたようだが、ぐつと口元をへの字に結ぶと、まるで機嫌を悪くしたように俺をにらみ返した。しかし頬と耳がうつすら紅潮してるのは気のせい……ではないと思いたい。

「何その開き直り方。馬鹿じゃないの」

「頭良かったら受験失敗なんてしないっつうの」

俺の軽口に彼女は益々不機嫌そうに顔を歪める。

「……ほんつと馬鹿……こんな時に何言ってるんだか……」

「じゃあな。なるべく騒ぎながら走るから、その間になんとかしてくれよ」
踵を返して出口に向かう。不意に服の裾を掴まれた。背中から声が掛かる。

「……あんた童貞？」

「は？」

「あんた童貞でしょ？ モテナそうだもんね」

「……いきなりなんだよ」

一切の脈絡無く、それも凶星を突かれて硬直する。

振り返ると同時に襟を掴まれ、そのまま見事な大外刈りを決められて地

面に押し倒された。

「完全な不意打ちだった割には痛みはおろか衝撃も無かった。体勢を崩された後はゆっくりと寝かしつけられたに近い。

仰向けになった俺のまさに目と鼻の先に、剣乃の顔が迫る。

つんと筋の通った彼女の鼻先が俺のそれと微かに触れあった。

彼女の勝ち気そうな大きい瞳が「納得いかない」とでも言いたげに揺らめいた。しかし同時に「これしか手は無い」と覚悟を伴った煌きを瞬かせる。

双剣の君こと剣ノ舞は、倒れた俺に馬乗りになり、額が触れあいそのような程の距離で口を開いた。彼女の甘く暖かい吐息が唇をくすぐる。それだけで後頭部がじんじんと痺れた。

「……良い？ 耳の穴かっぽじってよく聞きなさい。今だけは英単語の一つや二つは記憶から消去してでもよく憶えるのよ。あたし達だけじゃない。この周辺住民の命が掛かっているかもしれないんだからね。わかった？」

有無を言わさぬ鬼気迫る迫力に俺は黙って首を縦に振るしかなかった。

彼女はそれを確認すると、押し殺した声で、それでいて一言一句を明確

に言葉を紡いだ。

「あたしは元々継戦能力に優れた魔法少女だった。現役時代は何時間だって戦っていられた。でも一線から離れて久しい今のあたしは……不甲斐ないけどもうガス欠なの」

そこで一旦言葉を切る。彼女は悔しそうに表情を歪めて視線を逸らした。そして再び俺を見つめる。

その表情は何故か緊迫感が溢れたまま、照れくささというかきまりの悪そうな色が混じっていた。

「……あたし達第二世代の魔法少女の魔力の回復方法ってのはね、普通の体力と一緒に。枯渇してもご飯食べて、ぐっすり寝れば元通りになるの。でもそんな悠長な事は言ってもらえない。でも戦わなきゃいけない。そんな時、現実ならどうする？」

「え？ そりゃ、えっと……栄養ドリンクとか？」

「……そうね。魔力を回復させる栄養剤。それをあんたから貰うわ」

「な、なんだよそれ」

もしかして血？ 魂とか？ ええい何を今更怖じけづいてんだ。それく

らい差し出したらあ。

血気盛んに意気込む俺の予想とは裏腹に、剣ノ舞はこう言った。顔を真っ赤にして、視線を泳がせながら。

「お、男の人の……精液、よ」

「……は？」

「それも……童貞の精液は、すごく栄養価が高いらしいの」

「え？」

「それも経口摂取とかじゃ駄目なの。粘膜接触による性交を経て、互いに快感を高め合って、それから子宮に直接注ぎ込まないと効果は期待出来ない……言ってる意味、わかるでしょ？」

「いや、そのお……あはは。僕よくわかんないっす」

「いいからさっさと脱げこのスカタン！」

「い、いやあつ！ 犯されるうっ！」

「あ、あたしだってね、こんな状況初めてなんだから！ 講習受けて知識だけはあったけど、精液で即席魔力補給なんて実践する事になるなんて思いもしなかったわよ！」